

【ポスター発表】

養母が血縁を超えて親になるまでのプロセス
—複線径路・等至性モデル (TEM) による分析の試み—

○ 文京学院大学 氏名 森 和子 (004390)

キーワード：養子, 真実告知, ルーツ探し

1. 研究目的

わが国では 2016 年の児童福祉法改正で子どもが権利の主体であることを明確にし、家庭養育優先の理念を打ち出した。実親による養育ができないのであれば、特別養子縁組や里親による養育を推進することを示した。特別養子縁組は子どもに温かい家庭を与えるとともに、その子どもの養育に法的安定性を与えることにより、恒久的に子どもの健全な育成を図る児童の最善の利益を重視したしくみである。現実には養子縁組や里親委託された血縁によらない子どもの養育には特有の様々な困難や課題、そのための支援の必要性が指摘されている（広瀬・岩立，2011；中山・深谷・深谷編，2018）。養子を迎えてからの課題として、生みの親との別離を経験した上で施設生活を経てきた子どもが里親や養親の元で生活をする時に自分を本当に受け入れてくれる人かどうか「試し行動」（家庭養護促進協会，1998）を起こすことが実践現場では知られている。就学前後までの親子関係が落ちてきた頃に、養子に対して、養子である事実と大事な家族であるという真実を告げるという真実告知をすることの重要性は言われている。その後出自に関する様々なやりとり（古澤・富田・石井・塚田一城・横田，2003；森，2005；富田，2010）を通して、子どもの生みの親の属性や誕生・親子分離の経緯についての情報を求めたり、生みの親との再会（reunion）を企図したりする（野辺，2018）「ルーツ探し」が続いていく養子もいる。養親は、生みの親に思いを巡らせつつ血縁によらない親子関係にまつわる葛藤の経験をしながら、自らのアイデンティティを形成していけるよう支え新たな親子関係を構築していく（Melina, 1986=1992；家庭養護促進協会，1998；野辺，2018；森，2017）。このように養子には成長段階のライフステージごとに達成課題がある（Brodzinsky, Schechter & Henig, 1993）ことが明らかにされている。わが国では、生みの親がいることに起因する養子養育特有のライフイベントを踏まえた長期継続的な養育プロセスをとらえた質的研究の蓄積は乏しい。今後増加する養子縁組家族が、養育の段階で子どもどのような行動から養親は養育困難を感じ、その対応方法や養育者の心理的回復の文脈を明らかにするアプローチの確立は急務である。

以上を踏まえ、血縁のない養子を迎えてから血縁を超えて親になるまでの養母の心理的変容プロセスと支援を検討することを目的とする。

2. 研究の視点および方法

本研究は、カークの「運命の分かち合い理論」(Shared Fate Theory) (Kirk, 1964)を理論的基盤とする。血縁を規範とする家族観を重視する社会でも、血縁によらない親子であることを認識した上で、養親と養子それぞれの運命を分かち合い、「真実告知」から始まる養子の出自に関するコミュニケーションを持つことで血縁を超えて親子になれると指摘しているカークの理論が本研究には適していると考えられる。

児童相談所から養子 K を迎え幼少期に真実告知を行っている養母 Am さんにインタビュー調査の協力を依頼した。K は、現在 20 代後半の専門学校生で、養父母と養子の妹の 4 人家族である。筆者は K の委託後 20 年以上にわたり交流を続け信頼関係を構築してきた。

養子が成人するまでを長期縦断的に親としての継続維持要因と心理的変容プロセスを複線経路・等至性モデル (Trajectory Equifinality Modeling:以下 TEM) および発生の三層モデル(Three Layers Model of Genesis : 以下 TLMG)を用いて分析した (安田・サトウ, 2012)。データ分析の信憑性を確保するために、TEM 開発者の一人である研究者からの助言と分析の過程において青年期発達心理学の専門家にデータの解釈や方法論が適切に実行されているかスーパーバイズを受け検討を重ねた。

3. 倫理的配慮

研究協力者には、研究目的、意義、方法、研究協力の任意性と撤回の自由、不利益が生じないこと、守秘義務、個人情報への厳守について文書と口頭で説明し、研究発表についても同意を得たうえで同意書に署名を得た。個人情報が記載されているデータは特定されないよう匿名化を行い、研究協力者のプライバシー保護のためデータには最小限の修正を加えてある。本研究は、2017 年 8 月に名古屋大学大学院教育発達科学研究科研究倫理委員会にて、第 17-1010 として承認を受けたものである。

4. 研究結果

本研究の概念を設定した上で Am さんの養育経験の語りを分析したところ、64 の切片が生成された。切片化した内容は 24 のグループに分けられ、さらに 4 つのカテゴリーに生成された。この 4 つのカテゴリーを時系列に並べ (表 1)、本研究における TEM の概念と意味、位置づけを設定した (表 2)。TEM の分析では、養子のライフイベントの経験を時間的経過に沿って並べ、等至点までの経路に至る転機となった経験や出来事を「分岐点」(Bifurcation Point:BFP)、様々な径路をたどりながらも至った体験を等至点(Equifinality Point:EFP)として TEM 図に表した。作図にあたっては、研究目的に基づきある行動や選択などを焦点化し、「等至点」(EFP)に至るありさまを描き出すための「分岐点」は BFP と付け、他のイベント同様四角の実線で囲んだ。養母の心情は楕円で、等至点は EFP と付け二重線囲みの実線で示した。等至点の対となるような地点で現実には起こらなかったが

等至点の補集合的な事象を両極化した等至点(P-EFP)を設定し、二重線囲みの点線で、また分岐点で選択しなかった行動も点線で示した。多様な経験の経路がいったん収束する地点である「等至点」(EFP)を「自慢の子どもの親になる」「親子関係を継続する」「本来のKが見えてくる」「血縁を超えて親になる」と設定した。「両極化した等至点」(P-EFP)として「自慢の子どもの親になれない」「親子関係を断絶する」「本来のKを見ようとしなない」「血縁を超えた親になれない」と位置づけ分析で用いた。ライフイベントを結ぶ実線の矢印は実際に聞き取られた経路で、選択しなかったが論理的には存在すると考えられた経路は点線の矢印で示した。人の発達には質的に持続するため、非可逆的時間という非可逆性を示す時間の概念を表した。本研究では始めは血縁のない子どもと養子縁組することにより親になったが、その後の変遷を経て生みの親の遺伝子をもつ子どもを認め、生みの親の情報提供やルーツ探しのサポートを通して「血縁を超えて親になる」という趣旨の発言を複数行っていたことから最終等至点とした。この等至点の対となる両極化した等至点は、血縁によらない親子であることを葛藤の原因に帰そうとしている発言がみられる為、「血縁を超えた親子になれない」を両極化した等至点とした。

表1 抽出された切片とグループ・カテゴリー

切片の数	64 (例)「血が繋がっていないことを確認した上で始めと違う親になりました。」	
生成されたグループ	24 「「不妊治療」「試し行動」「出自に関するコミュニケーション」等	
カテゴリー (時間的区分)	第1期	Kを上手に育てる
	第2期	Kの反抗により葛藤する
	第3期	Kの理解が深まる
	第4期	ありのままのKを認める

表2 TEMを用いた概念と本研究での位置づけ

概念	意味	本研究での位置づけ
等至点 (Equifinality Point:EFP)	多様な経験の経路がいったん収束する地点	EFP1: 自慢の子どもの親になる EFP2: 親子関係を継続する EFP3: 本来のKが見えてくる EFP4: 血縁を超えて親になる
両極化した等至点 (Polarized EFP:P-EFP)	等至点の対となるような地点	P-EFP1: 自慢の子どもの親になれない P-EFP2: 親子関係を断絶する P-EFP3: 本来のKを見たくない P-EFP4: 血縁を超えた親になれない

分岐点 (Bifurcation Point:BFP)	ある選択によって、各々の行動が多様に分かれていく地点	BFP 1 : K の委託 BFP 2 : 小学校での問題行動 BFP 3 : 鑑別所の一般相談・精神科受信 BFP 4 : 通信制高校に転校・卒業
社会的助勢 (Social Guidance:SG)	等至点に向かう歩みを促したり助けたりする力	「親になれる」「夫の支え」「家族の理解と支援」 「専門家による的確な助言」「K の成長」
社会的方向づけ (Social Direction:SD)	等至点に向かう歩みを阻害する力	「不妊の経験」「試し行動」「学校から指導」「遺伝的つながりが無い」「発達障害をもつ子どもによる事件の多発」「高校でトラブル」「先生から注意」

Am さんの語りから作成した「親になる」心理的変容プロセスには、プロセスを促進する社会的ガイド(SG)と、プロセスを阻害する社会的方向づけ(SD)が多々見られたことから矢印で示し、等至点に至るまでの詳細なプロセスを表したものが TEM 図 1, 2 である。以下で Am さんの語りによる親としての養育プロセスを等至点に沿って 4 期に分けて概要を述べる。語りから生成した行動や選択のイベントは【 】で示し、Am さんの心情に関する語りは『 』として時系列に番号を付けた。その際の TEM 概念は()で書き足した。語りの引用は「 」で記し、Am さんの語りの中で説明が必要な箇所については()内に意味が理解できるように筆者が補足的に加筆した。

第 1 期「K を上手に育てる」時期

Am さんにとって「天はわれわれを見放した」と思うほど〈不妊の経験 (SD)〉が受け入れがたく辛かった。夫が 40 歳の時に話し合っ【不妊治療に区切り】をつけ、それでも〈子どもを育てたい (SG)〉と【里親登録】をする。里親になることを決意した時は、『地獄に落ちてやっと捕まえた蜘蛛の糸』①のようだったと表現している。里親制度や養育について一生懸命勉強して備えた。X 地方の【乳児院に面会】に通い、1 歳半の【K の委託(BFP1)】となった。K は生まれてすぐに乳児院に預けられたので『生みの親の遺伝的要素がわからないことに不安』②を感じた。家庭に来てからは物をまき散らしたり、食べるのにとっても時間がかかるなどの〈試し行動(SD)〉があったが『上手に育てなければ、これで諦めたらまた不妊治療に戻らなければならない。』③と、夫に話してストレス解消するなど〈夫の支え(SG)〉で乗り越えた。K が 3 歳の時に引っ越して Y 県 Z 児童相談所の里親サロンに通う。【真実告知】は児童福祉司から小さい時が良いと言われ、「神様が間違えちゃったんだよ」とおとぎ話風に話した。5 歳で【特別養子縁組】をし、K は小学校 5 年までは『頭はいいし気がよくきく自慢の息子』④として Am さんは【自慢の子どもの親になる (EFP1)】。

第2期「Kの反抗により親であることに葛藤する」時期：

【妹の養子縁組】から【鑑別所の一般相談・精神科受診】まで(BFP2~BFP3)

Kが8歳の時【妹の養子縁組】により家族が増えた。「あんたもこうきたのよ」と言うと、真実告知のことは全く覚えていなかった。その時に乳児院の保育士が渡してくれた保育日誌を読ませた。妹の試し行動が落ち着いた小5の後半から友達をたたいたなど、次第に【小学校での問題行動(BFP2)】がひどくなり〈学校から指導(SD)〉があった。Amさんは『これだけやったのにどうしてわかってくれないの』⑤と思った。【児童相談所に相談】するようになった。小学校を卒業して中学に入学し、次第にオンラインゲームで昼夜逆転して不登校になった。【中学校でも問題行動】を起こし〈学校から指導(SD)〉を受ける度に養母とKは取っ組み合いのケンカをした。Kが中3の時に【大喧嘩のすえ家出】し、【警察に捜索願を出し、翌日戻って面接】をした。この間『やっぱり自分の子じゃないし、養子にするんじゃないかった』⑥と〈遺伝的つながりがない(SD)〉子どもを迎えたことを後悔した。『この子はもうここにいたくないのかもしれないと思って、元(生みの親)の名前を教えKのいた施設の写真をみせた』⑦。『この子さえいなくなれば、家は平和なのに』⑧とKの寝顔をじっと見つめどん底に落ち込んでいた時に『辛かったけど不妊治療の辛さを思えば10分の1あの辛い不妊治療を乗り越えたから大丈夫』⑨という思いが浮かんできて【親子関係を継続(EFP2)】することができた。大変な時は夫のユーモアや祖母、妹など〈家族の理解と支援(SG)〉で救われた。

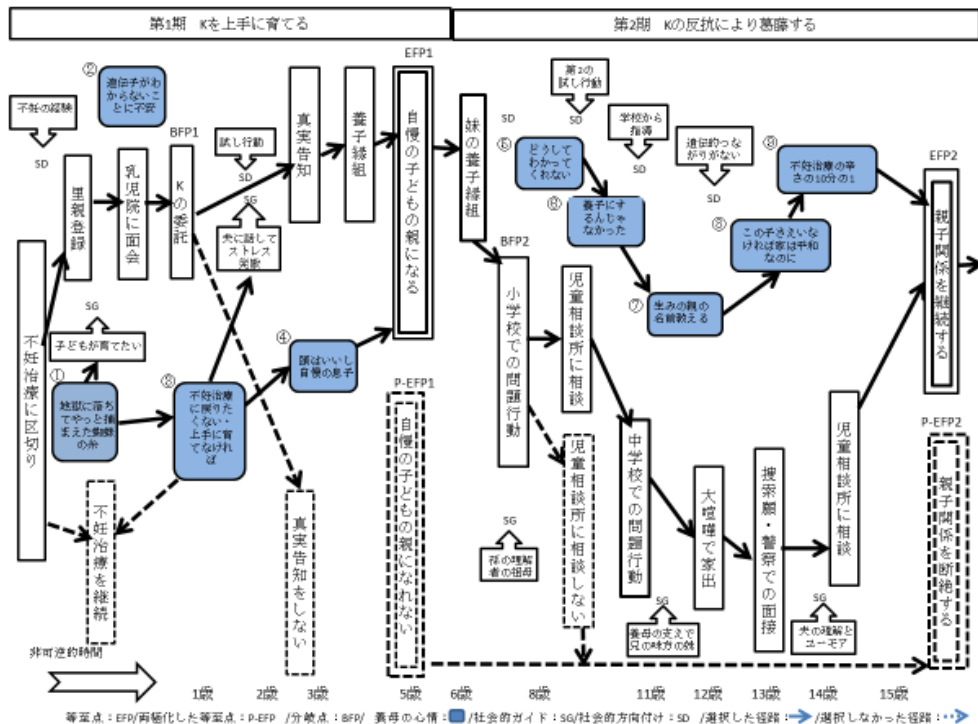


図1 「血縁を超えて親になる」までの TEM 図(第1期～第2期)

第3期「本来のKの理解が深まる」時期：

【鑑別所の一般相談と精神科受診】から【通信制高校に転校】するまで(BFP3～BFP4)
【児童相談所に相談】して紹介された【少年鑑別所の一般相談と精神科を受診(BFP3)】した。少年鑑別所では法務技官が親身になって相談に乗ってくれ、約1年間毎月【一般相談に通所】した。助言では「Aさんの家の教育方針は間違っていない。でも、今の時代のK君にはあっていないことは自覚したほうが良いです。」など養親の考えを支持した上での、『これらの助言は自信になった』⑩。また、毎日寝坊するのは睡眠障害かもしれないからと精神科の受診を勧められ【発達障がい診断】を受けた。当時〈発達障がいをもつ子どもが起こした事件が多発(SD)〉していたことが心配だったが、『これまでの不可解な言動に対する医者からの説明で目からうろこ』⑪だった。『血がつながっていないから、(生みの親から)受けついでDNAがあるのなら仕方がない』⑫と思えた。〈専門家からの適切な助言(SG)〉から【本来のKが見えてくる(EFP3)】につれ、ネガティブな思いが吹っ切れるようになっていった。受からないと思った【県立高校に入学】し、Kも自信と落ち着きが出てきた。

第4期「ありのままのKを認める」時期：

【通信制高校に転校】以降(BFP4～)

5月に〈学校でトラブル(SD)〉があり、また遅刻や欠席をするようになった。10月で県立高校を退学し、【通信制高校に転校(BFP4)】した。KもAmさんも落ち着いてきた頃に『この子に振り回されるのはもうやめよう。自分の趣味をして人生を切り替えよう』⑬と、新たな親子関係に移行する転換となった。【出自に関するコミュニケーション】も増え、「生んだお母さんに会いたいなら段取りするから」と『ルーツ探しのサポート』⑭を何度か伝えた。「顔が似てるくらい(のこと)で会ってみたいとは思いますが、向こうも急に来られてもこまるでしょ」と生みの親への配慮を示しつつ「血縁の父母に会いたいと思わない。僕はお父さん、お母さん、妹もこの家も好きだしね。」という言葉から〈Kの成長(SG)〉が実感される。【通信制高校を卒業】し【浪人生活】に入った。児童相談所から頼まれ【里親サロンで体験談】を話した。Kのいた『乳児院の訪問を勧めた』⑮ことがあったが、その後突然「行ってきた」とメールがきて驚いた。長い浪人生活を経て自分ですべて決め【専門学校に進学】した。『どういう人生を生きていくのか私たちは太刀打ちできない』⑯と思う。専門学校の当番をさぼるので〈先生から注意(SD)〉の電話があったが『私の気持ちが下がることはないですね。何をやってもどんなことになろうと彼の人生だよなって思える』⑰とありのままのKを認めるようになっていった。『はじめ家に来たときはA家の教育方針や子ども観に従って過ごしてきただけで、小学校高学年から第2の試し行動が始まってKの自分探しを始めたんだと思う。血がつながっていないことを確認した上ではじめと違

った親になった』⑩と、これまでの養育を振り返って【血縁を超えて親になる(EFP4)】プロセスを語る。

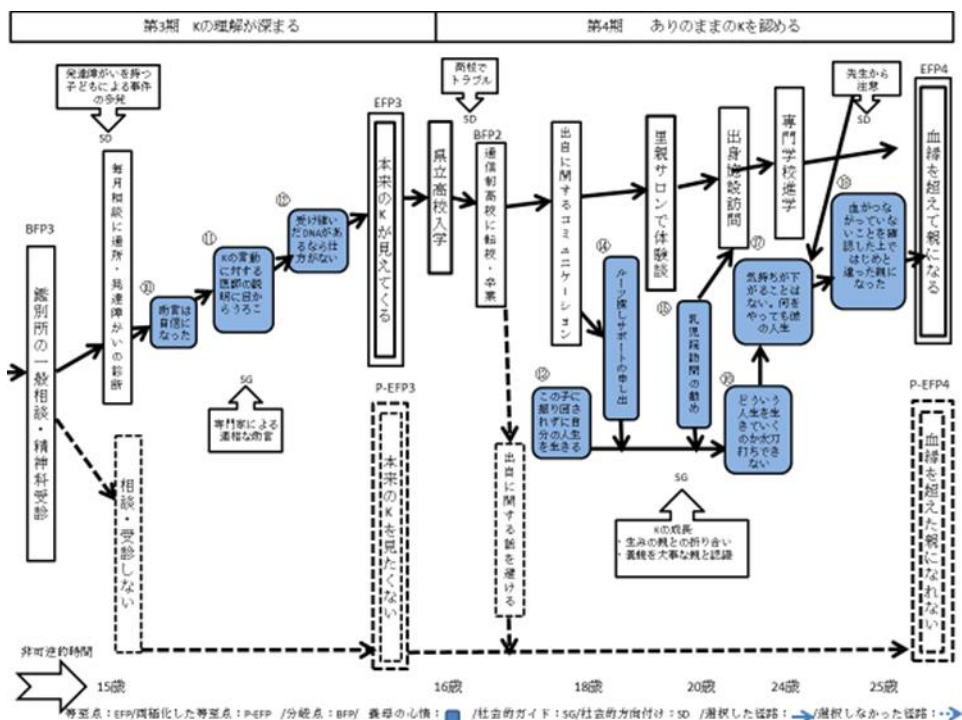


図2 「血縁を超えて親になる」までの TEM 図(第3期～第4期)

5. 考察

養子を迎えてから「血縁を超えて親になる」までの養母の心理的変容プロセスは TMLG を用いて分析した (図 3)。TMLG の第 1 層は個人活動レベルで記述され、行動変容を促したのは何かという観点から第 2 層の記号レベルが捉えられる。さらに、それらを第 3 層の信念・価値レベルで描くことで変容と維持のつらなりを可視化することができる (安田ら, 2015) という。以下で「親になる」変容を三層に分けて考察する。

1. 第一層「個人活動レベル」：過去の子どもの像と現実の子どもの間での葛藤

第一層での Amさんは不妊の辛い経験の末、里親養育について勉強して「上手に育てなければ」と日々の養育が始まる。血縁によらない子どもの養育において葛藤が発生するのは、委託直後の「試し行動」と思春期の「第2の試し行動」の時期と言われている (家庭養護促進協会, 1998;中山・深谷・深谷, 2018)。AmさんがKの養育をする中で葛藤が引き起こされる要因として、委託直後の試し行動は大きい要因とはならなかったが、思春期の第2の試し行動は、親子関係を断絶しそうなほどの大きい要因となった。葛藤の解決に影響を与えた要因は、血縁によらない親子関係であることに起因する「養子の遺伝情報の欠如」と養母の「不妊治療の辛い経験」が相互に深く関係していることが分かった。子どもを迎えた直後の「試し行動」では、養父の支援と『不妊治療の辛い経験に戻りたくない』

という心情が葛藤の解決に影響を与えていた。養子縁組を希望する夫婦の多くは不妊治療を経て養親となっている場合が多い。不妊治療を経て子どもを迎える選択をした女性への調査では、周囲からの期待や治療の閉塞感によるストレスを経験した上で、養子を迎える選択をしている（安田，2017）ことから、不妊治療の辛い経験が後戻りさせずに葛藤を促進させなかったことがうかがえる。その後児童相談所の助言に従い「真実告知」をしてKは『頭はいいしよく気が利く自慢の息子』に育ち、法的に「養子縁組で親になる」。血縁によらない子どもを育てようと思う里親は心が潔く、志が高い（中山・深谷・深谷，2018）という指摘があるように、血縁によらない子どもを育てる親は上手に育てなければという思いが強くなることもその表れと思われる。第2期では、その後思春期の「第2の試し行動」で、問題行動を起こし学校から指導があるたびに、過去の自慢の子ども像と現実の子どもの姿がAmさんに大きな葛藤を引き起こす要因となっている。養子にしたことを後悔し、どん底に落ちこんだ時にAmさんを支えた心情は『不妊治療の辛さを思えば10分の1、あの辛い不妊治療を乗り越えたから大丈夫』という自信と里親になった原点それでも「子どもを育てたい」という思いに至ったことが解決要因に転じ親子関係を断絶する方向に進まなかったと思われる。安田(2017)は、不妊の傷つきからその経験を問い直すことを通じて、マイナスとされていた不妊という経験はいわば血の繋がりのない子どもと共に築く親子関係への開眼であったという考察と同期する。そして、Amさんを取り巻く家族の理解と支援が常に得られたことは葛藤を解決する要因の基盤にあったことが推察される。学校での問題行動から始まる「第2の試し行動」により、血縁によらない親子であるがゆえにAmさんの思考経路に『やっぱり自分の子じゃないし、養子にするんじゃない』という親子関係を断絶するという選択肢が入り込んできたことは、養親に血縁親子規範が意識化されるのは、親子関係が悪化した時（野辺，2018）という知見と一致している。

2. 第二層「記号レベル」：Kの理解が進展し自慢の子ども像を手放す

第3期のAmさんは、揺らぎながらも親子関係を継続する方策を求め児童相談所に相談する。紹介された専門相談機関からの適格な助言と親としての自信という心理的支援を得たこと、さらに精神科の医師から発達障がいと診断されこれまでの不可解な言動の理解を得たことがAmさんの心理的変容を大きく促進した。乳児院に面会に行ったときに感じた「養子の遺伝情報の欠如の不安」という大きな葛藤に繋がりがねなかった要因も、Kの一連の言動に対する専門家による適切な助言から『生んでないんだから受け継いだDNAがあるのなら仕方ない』と以前に感じた遺伝情報の欠如の不安を払拭することになり葛藤の解決に影響を与える要因となったと考えられる。この頃に生みの親から引き継いだ遺伝子を持つ本来のKの姿が見えてきたことで、Amさんの抱いていた自慢の子ども像を手放さざるを得なくなり、「親である」ことが変容していくことになったと推察される。

3. 第三層「信念・価値レベル」：生みの親の遺伝的要因も含めたKの親になる

第4期のAmさんの次の等至点に至る布石となった心情『この子に振り回されるのはもうやめよう. 自分の人生を生きよう.』という思いに至るまでに,【通信制高校に転校】してAmさんに落ち着く時間ができ, Kとの関係性を俯瞰してみられるようになってきたことが転機となった. Kとの「関係性によるアイデンティティ」にとらわれずに「個としてのアイデンティティ」も大事にする方向でAmさんのアイデンティティ再構成のプロセスとなったと考えられる. 並行して, K自身の成長に伴い「ルーツ探し」など出自に関するコミュニケーションも増え, Kは生みの親との折り合いをつけ養親を大事な親と認識していることがわかる. 出自を探求する養子は, 探究しない養子に比べ, 家族に対して不満をもつ頻度が優位に高かった (Hoops,1990) という. 「生みの親に会いたいと思わない. 家族が好き」というKの言葉はAmさんに親としての自信を与えKを認める心情を促進し, 一人の人間としてありのままのKを受け入れることができるようになっていったことがうかがえる. 家庭内で養子の出自に関する会話がオープンにできるコミュニケーションが行われることが養子の健康的なアイデンティティの形成に影響するという親の態度や家庭環境の重要性は多くの研究で検証されてきた (Hoops,1990;Triseliotis,Feast & Kyle,2005). 生みの親から引き継いだ遺伝的要因を持つ子どもであるKの姿が立ち現われ, そこから「ルーツ探し」のサポートの申し出や乳児院の訪問など「出自に関するコミュニケーション」が増え, AmさんとKとの間で「かけがえのない親子」という言葉などから「共感・必要・助け合い」の相互交流と支援が両者の間で促進されていった. Kの成長も伴いこれらの体験が促進記号となって親としての価値が変容していき, 第3層の「信念・価値変容レベル」で血縁による子どもとの違いを認めることでKの養子としてのアイデンティティ形成も支える親となり「血縁を超えて親になる」心理的変容に至ったことが示唆された.

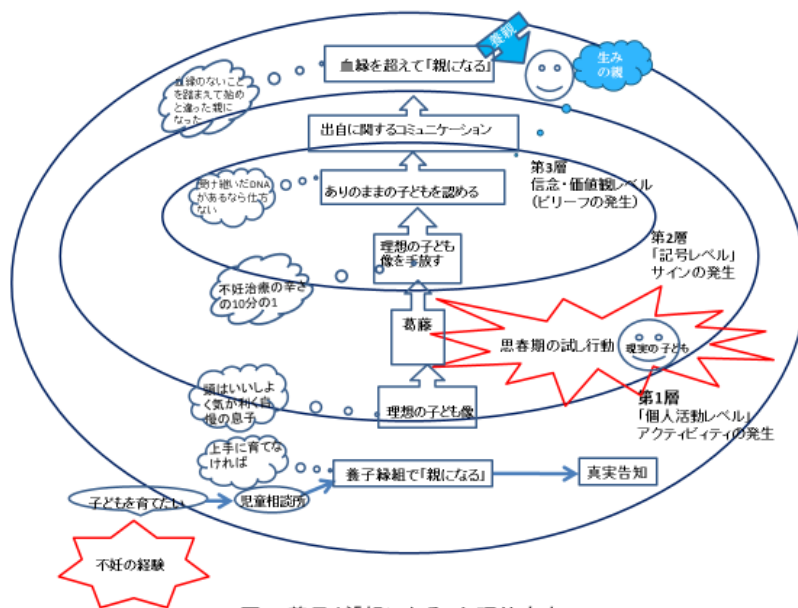


図3 養母が「親になる」心理的変容

引用文献

1. Brodzinsky,David.M., Schechter, M. & Henig,R.M.(1993)Being adopted -The Lifelong Search for Self, Anchor Books,New York.
2. 広瀬あや・岩立志津雄 (2011)「里親の養育態度が里子の生活に対する充実感や自己受容, いらだち等に与える影響」『家族心理学研究』25 (2), 160-173, 9.
3. 家庭養護促進協会(1998)『血のつながりを越えて親子になる』家庭養護促進協会大阪事務所.
4. Hoopes,Janet(1990)Adoption and Identity Formation, The Psychology of Adoption, Oxford University Press,144-166.
5. Kirk,H.David(1964)Shared Fate: A Theory of Adoption and Mental Health. New York,The free Press of Glencoe.
6. 古澤頼雄・富田康子・石井富美子・塚田一城みちる・横田和子(2003)「非血縁家族における若年養子へのテリングー育ての親はどのように試みているか?」『中京大学心理学研究科心理学部紀要』3(1),1-6.
7. Melina,L.Ruskai& Roszia,S.K.(1993)The Open Adoption Experience, Harper Perennial.
8. 森和子 (2005)「養親子における『真実告知』に関する一考察ー養子は自分の境遇をどのように理解していくのかー」『文京学院大学人間学部紀要』7(1),61-88.
9. 森和子 (2017)「血縁によらない親子関係の再構築ー真実告知後の養子と養母のやりとりの記録からー」『家族心理学研究』30(2),134-148.
10. 中山哲志・深谷昌志・深谷和子編 (2018)『子どもの成長とアロマザリングー里親里子問題への接近』ナカニシ出版.
11. 野辺陽子 (2018)『養子縁組の社会学〈日本人〉にとって〈血縁〉とはなにか』新曜社.
12. 富田康子 (2010)「育て親家族におけるテリングの効果についての探索的検討」『鎌倉女子大学紀要』18,27-38.
13. Triseliotis,John,Feast,A.&Kyle,F.(2005)The Adoption Triangle Revisited:A Study of Adoption,Search and Reunion Experiences, London BAAF.
14. 安田裕子・サトウタツヤ編著(2012)『TEM でわかる人生の径路 質的研究の新展開』誠真書房.
15. 安田裕子 (2017)「体外受精適応となった女性の不妊経験への意味づけ過程ー複線径路等至性モデリングを用いてー」『保健医療社会学論集』28 (1), 12-22.

本研究は平成30年度科学研究費助成(補助)金(研究種目基盤研究(c))課題番号18K02114(研究代表森和子)の補助を受けて行われた。